様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０３０５

研究課題名（和文）美的教育理念におけるS.T. コールリッジと密教思想との接点

研究課題名（英文）S.T. Coleridge's Idea of Aesthetic Education and Shingon Esoteric Buddhism

研究代表者
和氣　節子（Wake-Naota, Setsuko）

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：００２４８１１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：当研究ではイギリスロマン主義の批評家S.T. コールリッジと、日本真言密教の祖、空海に共通してみられる超越論的要素を分析する。
コールリッジによると、宗教では「普遍なるものの瞑想」により美を体験することで、カントがいうように私利私欲を乗り越え、「全体の中に在る個」として行動することが求められる。コールリッジと空海にとって、「永遠なるものと共に在る」現実を観ようとする我々の意志は、「感覚や感覚機能によってではなく、ただそれらを通しそれらをもって」観ることができる我々の先験的美的能力の証しである。人々を「全体の中に在る自己」を観る真の幸せの日常的体験へと導くことが彼らの執筆目的であったといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
キリストの福音の核となる、我々被造物と父なる神との人格的繋がりを語るような言葉は真言密教にはみられない。しかし、コールリッジと空海はともに永遠を視覚化する言語(「視覚的言語」“visual language”)を用い、「感覚や感覚機能によってでは決してなく、ただそれらを通しそれらをもって」、「永遠なるものと共に在る」美しい現実を捉え、真の幸せをつくりだせる我々の潜在能力を引き出すことを宗教教育の要とみなしていることを指摘した。ロックの経験論では十分に説明しきれない、超越論の「視覚的言語」が描く普遍的喜びの体験は、古今東西を通じて美的教育の重要性を示し、現在の教育が進むべき方向を示唆している。

研究成果の概要（英文）：This research clarifies transcendentalism in S.T. Coleridge, one of the great critics of the English Romantic Age, and Kukai,the founder of Japanese Shingon Esoteric Buddhism.
Accorindg to Coleridge, religion requires "contemplation of the universal" as it enables us to overcome selfishness and behave as "the one in all" through Kantian aesthetic disinterestedness.
For both Coleridge and Kukai, our will and volition to visualize the reality of "I being with the Infinite" prove our transcendental aethetic faculty to see“through and with, but never by the senses.”Their common aim of writing was to lead people to the everyday experiences of the real absolute joy of visualizing "I in all."

研究分野：人文学

キーワード：コールリッジ　空海　美的教育　ドイツ超越論　遊戯（美なるものとの遊び）　真言密教　『理趣経』　「視覚的言語(visual language)」

１．研究開始当初の背景

(1) コールリッジの信仰論、芸術論の特徴を、彼が多くの書きこみを残しながら継続的に読んでいたカントの批判哲学における美的想像力の働きと理性との関係の分析や、シェリング『超越論的観念論の体系』での芸術論と比較させるかたちで研究していた。

具体的には、コールリッジの『文学的自叙伝』、『政治家必携の書—聖書』、『省察の助け』、「信仰論」、また彼が当時のイギリス有識者層を対象に行った哲学講演記録を中心に、彼が信仰の核とみなしていた「霊的感覚 spiritual sensation」としての良心、「自由意志 Will」や「選択意志 Willkür」、詩的想像力を説明する言葉と、カントの『純粋理性批判』、『判断力批判』、『単なる理性の限界内の宗教』、『人倫の形而上学』や、シェリング『超越論的観念論の体系』における各概念の説明との類似や差異点の研究などがあった。

(2) コールリッジは『政治家必携の書』において、キリスト教とは「より偉大で神秘的な力」に突然、全身を貫かれる美しく崇高な瞬間を謙虚に心を開いて祈り待てるようになっていく(becoming)「日々の体験の事実を、信仰の核とする唯一の宗教である」と書いている。

しかし、真理としての法身の語りかけ（法身説法）や、この世でこの身のまま成仏出来る（即身成仏）可能性を仏教の多宗派のなかで唯一認めた空海の真言密教も、コールリッジ同様、真理へ近づく becoming の自己体験の事実を信仰の核とする宗教であると言えるのではないか—この観点から、コールリッジの宗教論にみられる真言密教的要素の研究に着手していた。以下の共著内の論文が当初の研究例である。

(Setsuko Wake.“On Artistic Disinterestedness: Coleridge, Schopenhauer and Japanese Esoteric Buddhism Compared.” *Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations*. Eds. David Vallins, Kaz Oishi and Seamus Perry. Bloomsbury. 2013. 145-161.)

２．研究の目的

(1) まだ研究例のない、コールリッジの教育理念にみられるカントやシラーの超越論の影響を検討する。

(2)カントが美的判断力に認める「共通感覚」がもたらす美的体験を、日々の宗教体験や教育の核に置いているという観点から、コールリッジのキリスト教信仰と真言密教思想との接点を見つける。

(3) 創造主としての父なる神の我々への愛を認めるキリスト教と、大日如来に創造主としての人格を認めない真言密教とは、根本教理において相反するものである。しかしコールリッジは「方法の原理」において、「より高次な第三のもの」を生み続ける「類似ではなく対照による調和」を評価している。またシェイクスピア講演においても、シェイクスピアの天才的思考法として、”*tortium aliquid*” (a third something)、対照的なものから第三のものを生み出していく方法をあげている。

コールリッジによるキリスト教信仰も空海の真言密教も、各々対照的な起点からであるが、ともに超越論的内省と外界の知覚という、相反する能動と受動の両活動を介し、「感覚や感覚機能によってでは決してなく、ただそれらを通しそれらをもって」、他者と共に、祈りながら待てる精神を喜びのうちに育成し続けていける可能性を強調するに至る。それは日常生活において、対照的なもの同士の拮抗から「より高次な第三のもの」として、「活力漲るバランス(living balance)」を生み出し続けるための祈りの感情を如何に養成するのか—という、現在の異文化間教育が取り組むグローバル人材養成に対し、超越論的立場からの美的教育の意義を示唆するものといえる。

３．研究の方法

(1) ドイツ超越論哲学に関しては、コールリッジが愛読した、カントの『判断力批判』、『実用的見地における人間学』、「負量概念の哲学への導入」、並びに、シェリング『超越的観念論の体系』、シラー『人間の美的教育について』を主に扱った。

(2)　コールリッジの理性と意志の働きによる宗教に関しては、主に彼の『政治家必携書の書—聖書』、『文学的自叙伝』、『文学講演集』「方法論」を用い、それらにみられる密教と繋がりうる見解に関し、空海の主に、『弁顕密二教論』『即身成仏義』『秘蔵宝鑰』『理趣経』を取り上げた。

(3) 主な先行研究として、Hedley, Douglas. *Coleridge, Philosophy and Religion* (2000), Kooy,

John. *Coleridge, Schiller, and Aesthetic Education* (2002), Llewelyn, John. “Imagination as a Connecting Middle in Schelling’s Reconstruction of Kant” in *Kant and His Influence* (2005), Richardson, Allan. *Literature, Education, and Romanticism* (1994), 松長有慶『理趣経』(2013)、『訳注　秘蔵宝鑰』(2018)等を基礎文献資料とした。

(4) イギリス 18 世紀から 19 世紀における仏教受容に関する資料、広教会運動や Lunar Society の主要メンバーによる教育論に関し、British Library, Cambridge University Library, Cambridge Buddhist Centre や高野山大学図書館での資料収集を複数回行った。

４．研究成果

(1)当研究の初段階において、まずコールリッジの視覚に関する見解を精査した。彼はシェイクスピア講演において、シェイクスピアが「心の眼(mind’s eye)」の働きを重視していたことを評価するが、それは「心の眼」が生み出す美的快感情が実践理性を活性化し、我々の道徳的行為を可能とし、信仰心を深めていくからである。コールリッジのこのような、「心の眼」の働きの評価には、プラトンの著作に加え、彼の親友でありパトロンでもあった、トーマス・ウェッジウッドの「視覚論」や、愛読していた G.バークレーの「視覚論」が影響している可能性を指摘することができた。ウェッジウッド、バークレー、そしてシェリングが認める、内官としての「心の眼」と視覚が触発する二重の時間の体験、言い換えると、現在に流れ込む「過去と未来の時間」の意識が、美的想像力を活性化させ、私利私欲を忘れて、我々に美しいものとの心地よい時間をもたらすと、コールリッジが考えていることがわかった。

(2)コールリッジは、カントやシェリング、シラーによる芸術を生み出す想像力の「遊戯」の説明を分析する言葉に影響を受けたことで、子供たちの道徳的感情、ひいては自らを超えた偉大なものへの信仰心を深める教育とは、「私利私欲を忘れて、美しいものと喜び戯れる経験の日常的積み重ね」が重要であると考えるに至ったことがわかった。
美しいものとの遊びを通し、「私利私欲を忘れること(disinterestedness)」で、相対的な感覚的喜びを乗り越え、絶対的な幸福を仲間と体験するに至るという同様のプロセスを空海『理趣経』にも認めることができる。
空海も『性霊集』での「遊戯(ゆげ)」や、『理趣経』において、カント的「共通感覚」に基づき、内に向かい内在の神秘を捉える意識と、外に向かい超越の神秘を外界に捉える感覚との相克が生み出す「遊戯」、法界から差し込む驚嘆すべき力に身を委ね、他者と繋がっていく「遊戯」を、「一切無戯論如来」が理想的な喜びの体験として説いていることを示した。

(3) 我々は理性による内省、個別化を求める一方で、他者との感覚的繋がりを求めるという、カントが「非社交的社交性」と呼ぶ複雑な本質ゆえに日々葛藤している。しかし同時に、そのような絶え間ない内的葛藤が、あたかも外からの突然の神秘的な力の導きによって一瞬融和されたように感じ、美と戯れるような絶対的な幸せを体験することがある。
このような、「永遠なるものと共に在る」神秘を体験し、「永遠なるもの」と自らとで真の幸せを創りだす体験、コールリッジの言葉でいうと、「感覚や感覚機能によってでは決してなく、ただそれらを通しそれらをもって」真の幸せを創りだせる潜在能力の自己認識体験をコールリッジも空海も共に重視し、宗教教育の核とみなしていることを指摘できた。美的潜在能力を理性の内的直観力と意志の力とで引き出していくことを根幹におくコールリッジの教育理念には、『金剛頂経』を重視し、体験型の求聞持法修行を薦めた空海の教育論と通じるものがある。
空海も『即身成仏義』、『秘蔵宝鑰』、『般若心経秘鍵』、阿字観論等において、内に向かう意識と外界に向かう感覚が生む意識との拮抗の中で、密教独自の「三密」や「法界力」の導きによって、我々の潜在能力が開花され、喜びに満ちた状態（歓喜地）を現世で体験できるようになることを強調する。
コールリッジも空海も、他者と感覚的に繋がることで、主体的体験の中から普遍的喜びを創り出せる我々の美的潜在能力を示そうとした点で、カントの超越論的思考や、ネオ・プラトニズムとの接点を指摘することができた。

(4) ロックの経験論では十分に説明しきれない喜び、即ち、内在と超越の神秘を捉えながら、驚嘆の真実が啓示される時の到来を信じ、仲間と共に祈り待ち続ける喜びを描写するに相応しい言葉として、超越論において用いられる普遍的喜びの美的体験を提示する「視覚的言語(visual language)」と類似する言葉をコールリッジも空海も探していたことがわかった。
コールリッジがいう「視覚的言語」とは「永遠なるものと共に在る」真理の体験を描写するための言葉であり、空海が求めた真言に匹敵するといえよう。コールリッジは『省察への助け』において、「真理よりもキリスト教教義を愛することから始めた者は、キリスト教よりも自らが所属する宗派や教会を愛する方へと進んでいき、全体(all)よりも自己愛に終着する」といい、他者への誠実で親切な行いに欠ける表面的信仰を危惧する。「永遠なるものと共に在る」喜びの

日常的体験を真理とし、その真理を「視覚的言語」によって象徴的に具現化しようとする意思の教化の重要性への訴えは、コールリッジと空海両者に認められるものである。
　今後は、引き続き『定本弘法大師全集』を読み続けながら、密教との接点も示すコールリッジの上記『省察への助け』からの言葉（「真理よりもキリスト教教義を愛することから始めた者は、キリスト教よりも自らが所属する宗派や教会を愛する方へと進んでいき、全体(all)よりも自己愛に終着する」）に賛同した、ヴィクトリア朝のトーマス・アーノルドや、フォイエルバッハ（特に、*The Essence of Christianity*, tr. George Eliot）等のドイツ高等批評へのコールリッジの影響、更にはジョン・ラスキンの『近代画家論』、『ヴェニスの石』、『この最後のものにも』にみられる美的教育論を、コールリッジの言説と比較するかたちで研究を続けていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

Setsuko WAKE-NAOTA, “Contemplating Genius: Coleridge on Shakespeare,” *POETICA*：*An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, 査読有、85. 2016. 75-95.

〔学会発表〕（計　4　件 ）

① 和氣節子　「コールリッジの超越論の特徴：啓示宗教が示す喜びの伝達」。第 176 回関西コールリッジ研究会例会。2017. 11.25 於：同志社大学

② 和氣節子　「S.T.コールリッジと真言密教との接点」第 4 回空海学会　2017.9.16-17. 於：栃木県益子町中央公民館

③ Setsuko WAKE-NAOTA. “Contemplating Genius: Coleridge on Shakespeare.” 国際学会 Coleridge and Contemplation.　2015.3.27~3.29. 於:ノートルダム女子大　(招待講演)

④ Setsuko WAKE-NAOTA. “Leap to a Better Self in Coleridge and Kukai’s Japanese Esoteric Buddhism.” 国際学会 Romantic Connections. 2014.6.13~6.15. 於:東京大学

〔図書〕（計 1 件　2019 年度出版予定）

和氣節子他、東大出版、大石和欣編『ロマン主義の哲学―コウルリッジの思想と文学』(仮題)、「遊戯を通して神を知る―超越論者の美的教育論」の章を担当。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。